



令和6年度 加藤繁美保育ゼミ

～実践記録から読み解く、子どもと保育士の対話的關係～

R6.10.17 保育センター 発行

山梨大学名誉教授である加藤繁美先生をお招きして、保育ゼミを開催しています。加藤先生のゼミは、一昨年度、昨年度に引き続き、今年度で3回目となります。

このゼミでは、受講者が自身の保育実践記録を発表し合い、保育の振り返りや分析を行います。実践記録を分析すると、実践している時には気づかなかったことが見えてきます。子どもの声を聴きとり、子どもを主体として保育を展開していくためにはどういう関わりを大切にしていって良いのか。保育者自身が保育実践を語り合い、質疑応答を重ねながら学びをつくっていく内容となっています。



各グループでの発表・分析



全体への発表・加藤先生と受講者による質疑応答

加藤先生より

保育に意味づけをする！

実践記録を書き、保育者集団の中で振り返り、語り合うことで、自分の保育が見えてきます。

さらに分析をして、なぜそのような関わりをしたのか、自分の関わりが子どもの育ちにどう繋がるのかを探ります。

このように、実践した保育に意味づけをしていくことが、豊かな保育実践をつくり出していくカギになります。

小さなやり取りも大切に！

記録にはいくつかの場面があります。記録の中に登場する子どもとのやり取りを小さなことでも記録していると、場面の切り替わりが分かり、子どもの心の動きが見えてきます。

また、記録を書き続けていくことで、子どもの声に耳を傾ける時間が長くなり、子どもを主体とする保育実践に繋がっていきます。

受講者の感想

子どもとの関わりの中で「ひらめき」が与えられ、それが面白い方向に行くという点も凄く胸に残った。毎日の保育でのひらめきを大切に、次回にむけてレポートも楽しんでかけようようにしたい。

心動かされるエピソードは多くあるが、「それがどのような意味をもつか」「どう実践に繋げていくのか」というところまで考えが至っていなかったように思う。子どもの成長に即し、心を動かすことができる保育を行いたい。

子どものことは子どもに聞くということが印象に残った。答えを言うことは簡単だが、子ども同士でやり取りをすることで思いもよらない展開になることがあるので、取り入れていきたい。

保育実践記録を書こう

— 保育の質を高めるために —

保育実践記録とは

保育実践記録とは、保育実践の中で、保育者が心を動かされた子どもの仕草、行動、言葉等の事実に加えて、保育者の行動、言葉、心の動きをつづったもの。記録にはタイトルをつけ、率直な感想も書けると良い。

自分達は、日常行っている保育実践の中に、
どんな意味づけをすることができるか？

重要なのは、記録を書くこと
ではありません。

記録の中に登場する子どもの声を、具体的な保育実践の過程でどのように大切に
していくか。
実践記録を書くことは、子どもの声に耳
を傾けることを意味しています。

実践記録を書く意味を
考えましょう。

実践記録を書く最大の意味は、保育者が書いた記録の中に実践の本質(真実)が映し出されること。記録を持ち寄り議論することで、保育者が大事にしている無意識の保育観(保育者の思い、子どもの思い)が映し出されてきて、保育の「真実」に気づくことができます。

保育実践を日常的に
語り合しましょう。

実践記録を書き、評価・分析していくことを保育者個人の中で完結させるのではなく、保育者集団の中で展開していくことが重要です。保育実践を日常的に語り合っていくことが、豊かな保育実践をつくりだしていくカギになります。

実践記録が保育にもたらすもの

- 子どもへの関わりの振り返りができる
- 子どもの視点から保育実践を見つめることが可能になる
- 保育実践に、机上の理論ではなく、生きた理論を繋げられる



実践記録を書き続けていくことで、
保育の質が高まる